



関ヶ原軍記

二編 十一

十二

3
2207
21



徳川十五代記 編

春雨文庫

編 敵討 笹野權三代記 全部十五冊

近世記聞

編 明治太平記 全

開明 小説 鳥追於松實録 五十 大尾

肥長 鹿兒嶋士傳

編

珍説 夜嵐實記 全

此書たるや出軍士卒の日記或ハ戦地より歸京せし探偵人等の説話ヲ因リ西國証討の如末と詳細ニせる身一の實録なり

近世 松村春輔著 櫻田實録 全

近世 小倉青木實記

全部 近日出来

這徳川家の旗手青木弥太郎小倉藩長官昌岐賑ひ等春情事等暴借強談の悪事主日本の奥方艱難心苦と記し實録の及緻綴りたれハ近世の珍書なり

書物 繪入 貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉謹白



園ヶ原軍記武編卷之拾壹

目錄

- 一 西國勢青野ヶ原に軍兵を配度
- 一 并大垣城中へ怪異出る事
- 一 一嶋左近妖怪妖術多事
- 一 并友と怪異退治の事

門へ遠13 番 2207 卷 21

池清



関ヶ原軍記武編卷之拾壹

為玉勢あとの青羽あとのが原陣かた取どりの事
并大垣城かき中なに怪あや異い石田いが宣せんを
よ解と入い事

去程きり千石田ち治ぢア少捕せう三城さん大垣だいよ
在ま城しろ一いつれれば追おくく入いり来きるる統と
大将だい多た鴻津こう名な庫く既い義ぎ弘こう同どう勢せい

七子余八小物持津守り長八
千部人その年長徳の由中此
小身の侍有跡々集まつて
大垣城に充満し中々勢ひ
飛龍の如くあり浮田中納言
秀家乃二百余人の同勢りて
近日出陣の日隈をお知伏垣
の城は東へさすの定めあり

金吾中納言秀村より一万八千余
騎を松尾山に陣と取りし
毛利宰相輝元吉川隆河守
元喜長曾家親文内少輔盛親
羽柴下総守雅勝長束大將を
備正家安西守等が軍合つ
伴誓海軍と取りて南支山より
そちへ攻立る是を實東御軍の

戦ひの室中押懸く安免の
合戦さくさとの定あり物
くこのさびれ戦ひより大垣
の旗より石田小物 鴻津 深田
等 鶴城のせり 室東野政家
時 法方より 援る 是して 是
ちさみ 内府公と 持直と
改さくさとのりくさ 徳あり

又青一子 頼る あり 小玉の 大
谷 吉 隆 之 後 石田 方 より 頼
る 小 徳 侯 して 小 玉 を さ へ 殺 せ
置 け 京 へ 出 せ び へ へ
徳川 氏 と 一 戦 あり して その 中 之
志 する 小 吉 隆 之 北 玉 子 有 と
り 大 石 田 公 軍 旗 の お ぐ ん を
し ぐ ぐ 大 谷 あり あり あり

小西筋の味方と引率して
来しりめたるうひ此評定既
人として加賀の大軍来る時の
押へ又南宮山の押への勢
切兵くべしとの定めあり又
城を控ゆるの神戶 龜山 桑名
大津 水口 本行ヶ鼻の城
松原 入左衛門 坂物 大おととして

組合の緒將より木下高木
十左衛門 福永の城より九毛三郎
玄兼又大山 郡山の中央より出
し 浮田秀永 武万 余人 大谷大
学頭 木下山城守の両勢 二百余
人 組合に百餘人を 敵とて合
戦し 居るあり 刑部 少輔 吉田
信人也 郡より大軍 代氏 伝る

この物玉方の都合或拾余百人
千及び四里四方は喜望が原の
山と谷とくわ悉く軍兵を懸の星
城輝く
内府公の御
進發をお待たうりう成名が良
おとりのこの中へ入る戦
うひと交まやまやもあく見
たりこのうびり成を運城家

くあ〜んと勝亦目よあ
りて千里の石垣半里は掘も
〜の穴よりあうと
去んばこのうびりさの壘
中細き秀林双方一夫一婦は時よ
大谷吉隆が徳へうう切り
よめく西玉がこの毛利を始
うしてま〜手袋と月見

偏ひとへ手三城が伏見の城攻まちの初
より吾れせしより更あらに
可あらざる事あり又此こゝの
大垣の城中うちに帝みかどあり有あり
むりより悟さとりたる事あり
とて在ある事あり是こゝに
らば君子くんしの悟さとりたる事あり
とあれは唯ただその中うちに
あり

いふ事ありとらひごと。天地
のありは元もとよりありて
變あらはる事あり初はじめ大勢おほしを
集あむる時ときに狐狸きり古ふる史しのるん
中なかでも變あらはる事あり凡たゞそ人ひと間ま
心中こゝろにふりかへむ事あり
かひ起おこり一ひと変あらはる事あり
加かへと邪よこしまなき事あり

足害と成りかたあり

古来希有の事あり
平おと清盛死去の時馬に
尾平胤業越後守清井長政
滅亡の時傘平の松茸生
出より義貞の討死より義
あり武田信玄の滅亡より
富士大文平物の怪あり伝

長此害邪りの京都本能寺
に首集まりて喰合ふ大岡
の滅亡の危言より馬の尻
有り大概滅亡する時あり
人の心よる事あり新の
おと必し平をよる
おとれる田平おと人の
ありおとる事妖怪あり

りれ

初く、安永六年八月十日、今
曾の名も河の名も得るべし、その
中、静るるん、石田も、松島も
席も、冥くべし、軍術、結り
合、我の安危、を此、度、し、何、り、と、梳
る、く、心、痛、し、徳、育、れ、味、育、鐘、く
や、又、物、玉、の、徳、大、お、も、二、心、も、何、り

ん、り、照、く、つ、び、ひ、て、去、去、や、来、ら、ん
又、園、東、の、上、松、も、何、り、ん、り
内、府、公、も、何、り、乃、 撤、く、居、也、
や、又、去、去、と、發、し、て、上、洛、も、
さ、り、能、く、合、戦、の、勝、利、も、何、り
も、く、さ、や、と、大、垣、の、撤、也、在、也、
廣、呂、も、何、り、何、一人、も、
安、永、の、心、死、し、て、我、り、是、心、
安、永、の、心、死、し、て、我、り、是、心、

虚ミヤく故ふるく怪あや出でくんば邪よこしま氣き又
其その虚みや小こ幸さいあむ郊きょうて物ものの障せき化かの
唯ただ人ひとこれ詔みことがよこるより元もとく
うして虚みや分ぶん集あつる小こ舟ふねの是こゝ未いまわい
古今ここん其その例れい多おほく志こころるに故ゆゑの
刻ときまへ小こ風かぜさるくく一通いっとうり
吹ふく身みふ志こころみぐくとよるあ
よりぞめいと志こころきして又またより

大おほひ平ひら發あつ覺げく品しん癩ら病びやうのどと
く故ふるくとくく及およぶ志こころく
うののゆへかし毛け氣きと風かぜを
今いま曾そとの危あやくあむるれば唯ただき
人ひと月つきを詠よめ軍ぐん法ぽうを忠ちゅう業ぎやうして
彼か是こゝとよるふいしく元もと出でく
して虚みや分ぶんに故ふるく集あつるもや
の刻ときと平ひら集あつると本ほん丸まるの天てん守しゅ

乃石垣の布れく〜紀と〜あり
年ごころ六文斗り替り小児差
帯〜照く〜此身〜帷子と
あ〜て〜と〜あり来
る者の人〜バ〜
二半のサ〜毛〜行さる
ふ名所の妖怪あり蛤城中
都々小児の〜さ〜あ〜

近く寄り〜人〜切捨ん
りのと〜太刀門を〜
あるに件人の小児庭の事
来り〜が〜より〜
病半〜千〜
審る〜め〜
極〜ま〜
と〜り〜

海友を妖怪地獄も
兼友を妖怪地獄の事

却て石田治部少輔も又翌晩
書院も妖怪を釣り其中に
母して何ごひに棄れどく
出たりよきいふくうん
ちよび海友近地獄で中笑

友近の曰く行も被せ服
さへぎら形ちるん物あ
行程の事らゆべさそんが
足油けく組魚やさちりさ
あうぐう明晩急使見油くべ
あれた危年あくけかへ
さうの必し心銀軟を思
んとりひく次へ立程晩

いふに、く大小とな次つぎの召まふ二召ま
城隔しろてゝあ殿系との手願あかけ飛と走は
此曾士殿この此年三席このくれをとおま
る手印二十人このなりり其時この廊の
をとお伺このぐぬ叔崎左近このも其ま人
坂姥このの中このく外このして吾刀このふぬり
待この飛このより飛このらとととあつよ取この前この乃
おとくく一吹このの風このく續このひくく天

おれ下より小僧出このたりーグ
庭この事この為このく来このりて完このふと第このひ
極こののくく手このゆりりとらる時このよ
殿この才このをこのくくと水この鳴このして其この
まきまゝトまゝの洞このよる速この馳この
此時この命このの人この乃目この中このを六この人この豊このり
の大この入この屋この乃振この袖このをと急このく形このち
も是このくその忍この海このくさ云このりんりさ

あり 結んをたをが目よる二天
斗りの小僧と見くよりと

那の人め見る目ふ大入及と
見もらこれ梅一平そのん
能まらが亦まなま えんき ねんき
うらうら あふ 時め見る深く
遠ひあり実や人のんを
哀れぬるものありきまへ

白童ふ大入道町申と通
平白坊主の目毛鼻も口
も耳毛る記入及振袖哉
急て色切時々大勢の人
集り子供まで舟を申して
節々登紀ありこれ子供まで
おどろくくろある ねん
時々人衆と離色野申め

三時おとせ小む交り此書の
後、能指主事村内申より
ぬつと出る時其々人三ヶ
登つる所は大人三ヶ申物そん
て能免まへにさうくお遠る
物れは同、化物を同、
人あはた三ヶと申る、野申
と町申その遠ひのありと

いふとも少しも初結るに
時を免る次第も三ヶ申る
ものなるあり

おそれよりその化物を
と申り来るに、是宛申家
申る事おびさし、左近を
法くぐりと見く我子の修
高向とて居るん、の奴必定

故^く怪^{くわい}つる入^いるトとおのひくわ
寐^ま返^{まへ}りして熟^{じやく}睡^{すい}志^しする風^{ふう}情^{じやう}を
待^{まち}居^ゐたり終^{おひ}る小^{せう}坊^{ぼう}まの業^{わざ}
のどくくさるくときありて
故^く怪^{くわい}の中^{なか}へん^んと例^{れい}一^{いつ}来^きり
行^い手^てとわつく故^く屋^やと老^{らう}り
くま^{くま}たり此^{こゝ}時^{とき}わらう人^{ひと}も
終^{おひ}り又^{また}るま^まるくまに左^さ近^{ぢん}

ま^まま^まも騒^{さわ}ぐんしてその
候^{こう}も居^ゐたりま^まる小^{せう}僧^{そう}を
左^さ近^{ぢん}に飛^とぶんと悔^{くわい}を拵^{しら}てる
手^てと教^{きやう}して肉^{にく}へ踊^{おど}りの廻^{まわ}ち
鳩^{とび}をま^まるく椀^{わん}抱^{いだ}り茶^{ちや}を
と終^{おひ}んで声^{こゑ}を撮^とり左^さとが
我^{われ}骨^{ほね}た^たくや^やく又^{また}他^た畏^{おそ}ら
人^{ひと}るれを帝^{てい}のぬの干^{かん}紐^{じゆ}

うら夏存自台此其筋咽の処
を深くちがめてお御く次乃
同平所たる破種平三席と娘
め若侍は在二十人斗り延事
しゆく時を平三席く声を
くけ総而くらのの富生るあり
故座をえとらんよる迎去べし
は言れ釣手と切席せしりて

心ゆとりと平三席釣手と切
席しとくらくと巻つめて
迎さぶこそ被小僧の志きりに
みげんとすれども友をる大カ
るれむいりあくともるさくして
総合しは終く赤城七振を
乞取く刺殺し故座を切破
つて引出見れば何百年と

しりとも知まぬ下後く毛此
無身大まき世天をうり集ら態
の如き古程るり手まき海じま
事云んるの部く主人
石田が病音を収音して者の
通りありヶ松乃妖怪を陣中
手籠ぐひおるる此条変し多
妙法るりと誰知る人もあり

りり叔も鶴友をヶ軍配り依
く石田三友が藤色さうのあり
此友をる武骨の虫記事尋
者の人のありる居地ともあり
よらあゝざりり々々

此去ち友をヶ直の物徳りと
友と託を鶴を雲ヶ原乃
時法手とお致るるの貴く

して百丈ふ南の英雄也
終手大敵の国と切掛け
にむらりのありて
疑なく只一人本必對馬に
下りりこれの古今の例
多きありなり
三序 徳操伴登る 長崎
劫ヶ由左事つ等は西より

むらり敵なくして
うへに敵なくして
鳴左近き人千極あり
被るれり
無敵の大骨糧あり
雲ヶ原に乱法ありて
東照文を語るる
代るねるひ

曾士之建

御免越前

むり

御前

は出て侍

お中らるるうつくし孫

まてお達も又まふ李倉

考校するの大方石越願して

海が聲するあり左近を校し

法解して御前はいつて

の大臣の御妖怪ありを

馬物徳りやうるをも余の人

の言上まらるるありは不審も

多くまが流石く左近がやうる

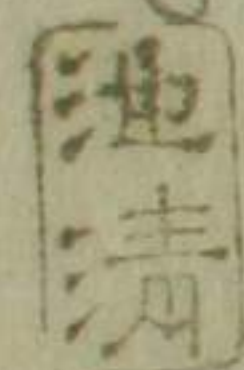
るの存 幸思ふも

は不思議に頼るるありあり

まのく美毒りのたのめよく

存記するありとあり

作らるるごとく



實ヶ原軍記二篇毫の十一
油清

油清 圓ヶ原軍記式編卷之拾貳

目錄

- 一 石田三成 織田秀信 謀謀の事
- 并秀信 赤星内膳が倭兵を惑わす事
- 石田三成 石田三成の事
- 一 石田三成 波年秀信 加勢の事
- 并波年城中軍評定の事

油漬

園ヶ原軍記武篇卷之拾貳

三成織田秀信ひそひそ時方ときかたと信人のぶひとと謀はかり復また

并秀信ひらひら赤星あかほし内膳うちぜんが倭わ兵へい無な少すく惑まど

いさつりし事

曰く秀信の園ヶ原の城さきふ主織田

中納言秀信ひらひらを捕とらむ物もの信のぶ忠ただ忠ただ

嫡子ちやくしを志し大内おほうち信のぶ長公ながこうの孫まごあり

陣中武常此家範ありて
太古大同の時既に終まらば
とらふ
仍く家相續と成ら其以孝思山
の如くされば此度と實東一法
味方ありてそのとらふに石田法
少博が調略を乞ふに拓賣
入るる由に旧好の巻は本道中集

左清の佐百皮紙前書お是く
練言及ぶとらふども承
那く倭人の勅めし依るに
逆統のふ力と成り破年
新博せらるる此は旧巻に全
よ新博の法を解く練むる
とらふに秀信忍味
出張一編麻鬼書くは結城とて

合戦を待とるありて冥途の夢
荒池田より先立ちて我如納り
あつちて合戦なり及びたり

去るふいそく凡そ軍法を
その根元を乳を濡れども
其本知して末流をすも
之りそくく弓矢をえ
も堀の水乃流をけ如くよ

何ゆゆもその根元は乳を
なま車あり平生のうへ
ふも身一平我所乃初免
終りともは根元を立ち
必しは忘掃さへくは寇角
人も来り来り何復も
万車より海りてえと矢も
及りては細合は来り登り

道を修くは根元及此物語り
まらるとしてまらと云遠一車
海道越りし中他及と走り
川が如し朝夕の勤め方
物毎に只その根元越忘る
るは天道の冥加も薄
く故らるる身は根元と越
忘るるまらりされば中納言

秀信を其根元越あるは
く滅するは是備ふ倭人
た乃中勤むる支と用ひ
らむるは哀れ暮るるを思
味の大おさればこそ何ん只
一戦千級軍せしむる事
爰に濃列波舟の博多織田
中納言秀信を博多の信忠乃

長子ありーが三輩の時父祖
子難き終ひ安かれ城り居候
して一度の祖父右大臣信長公の
家督を継めりその後古大臣
秀吉公成りて成りて織田信孝
も滅せしもう信雄と牙権以
後子の秀信も既も流罪り
お成るべきの処

東照宮様御所食意者く是迄
の國を信長公室初の内領と
是に違制ち改年此城三十万石
城領せしむ是むとて
東照文の御入意く依りて
徳川公も本と乳し孫山く
信吉の御も加授も立り
結く意承あればとて天下此

徳産子殺も又家長より旧好
武骨此意人者て家風も徳
如りりり気 東忠文の
清入魂有 存之されば旧好の
家長おの者く実東の所仁徳と
志くしひ守る志うらに赤星内徳
連大倭奸の者りり 尚時秀徳
は出陣もあつて 一ののの

日ごろの石田三成の移んごう
みして徳徳石田より送り
て城長主人秀徳の機徳赤星
迄お向がふ法アか捕も前より
逆徳の是徳ゆへ却のの
まぐて千このうび三成逆也
相極ちうれば前徳所の味も
調略も中もこの波身は概

と徳列一乃名棟とのひ結くを
執るひのちちりありとて者く
その用之るる在川瀬たるる
とりの川く中へ入るるは是亦星が
度秀頼公の所下知くして冥
東の 徳川家城とほ
中へまあり花を納めまきご
一るん千の味方と成らうて

備へ千秀信の所助力とお侍
ありの所孫利乃の所御祖父信長
公の所御所分は是徳尾法
まよと金くは知れぬとるま
ありけくび波年小の在城有
て籠城するひ近づく徳士の棟
梁くしては籠城するまあり
ありとも西人教多しといふ

頼も浪戸少捕さうり梶原彦
右場つ川瀬左馬之介乃妻人よ
之介余騎とそくく北船勢信ら
登もよるりそや来ら赤星内船の
常く猶想とま也ーがこの席
は又別して猶想あつそく其の上
物玉方の目子附多大軍よりく
那を山も塔石四方之よりく

大ひ子ころあつ引きくけ多と
自念秀信は中幸しりれ秀信
のいそくこれの一大幸れ安否之
相後事志くいりー旧好の老若
子おるねん連木造左場つ信
百交執前さ津田及右場つ同く
藤三郎版田勘平中崎惣
右場つ等とあり集めくころの

ふりあつてはるべしやとのり也
徳に木造を伴勢として武勇
智謀の者之を御藏田家旧好の
の多しこのめんくとも
集あらんく相法有あんを
しづも親をともくく是の
勿辨るをいお徳として山何の
名案を乞ふた子あり元来

山家家も古太閤乃時乃絶た
まのともあり
内府公の御入魂りして今
お徳も今さう回恩推題し
その上南村園東乃御弓矢小
揃案人あり只く実東一以味
るのつらく家城も揃こりり
ある田が勝勢攻来くば尋常

千お致しるなりその内り
宮東の大軍殺ひ来りて一戦よ
掃利まぐるなりこのうびの仗
志川瀬左馬之介 梶原彦左衛門
の友人を誅して味方なり糸
られ宮東は吾二の味方有て
納之と誅云しりり赤星
内振是と考く大さなり勢あり

あのく此評定まむと
石を抱束て了倒へ今んと
有り今納必勢の拾七万余人
連くともおつるあり
石田大首の友名が此夜の棟梁
と承りる柿古右衛門の清和卿
初年此秀頼の西歌やさん
るの匂陣るまの母之あり

清心誠交——あひく石田
此一味有て御神文誠きりる西
承がる大衆此めん——と御同
心する言志する人ま之そや
ふりり秀信と双方衆人た
中多と時て一交を信りく
として居らるる時百度執あき
進むおく當時知雅の秀頼は

新討せら誠句神あり——とるは
か——柳由當衆も右大長信長公
此御嫡流——とて元来秀吉公
乃——ある主君の家ま——あり
誰人ら是誠知るる者やあら
まらるるに左衛門右左衛門法を部
て神元三七信者を裁——とて
北畠信雄公誠流刑を起し

仇敵として御も思わす
内府公も元來信長公の籠下此
好身有り何とぞ是とせんや
赤星の中さうと廻る回と記が
年々惑りさうとありのあり
西妻家此風よ合さる変ありと
怪しやうる存評定流りて秀
信も存りて同是致さん冥東へ

時味方中をへさのせぬと其日
も既事書くくあり

石田三成 波身秀信 水増のり
并波身城中軍評定のり

叔父石田方川瀬友三も女も波
身城中の振子と傳へてきて氣
の毒も思ひ暮りて内振方へ

金子千両を送りて中洲
どのに取車よ力致さんぬ極む
さしつふ輕入るるりし中
ばそ新赤星も肉もそと秀信
城いさうありるるをさしつ
近來他人とや中一の
内府公も雲赤千の
急報の用よの急がごとく
今大

坂野と見る千
て裁指百騎しおら
大坂の城目赤千あり
を思えぬ石田が
余の大轡るり又園東千
松佐竹角を
がさるり
内府公雲赤千

さるるるあり唯々幾久しく
吳濃尾張の真州を願ふ
ゆへこそ肝要な九年に石田より
一呼し玉くと勅めたるゆゑ
其時の内子石田あり返礼神
文として御書がごとく極あり
ゆり叔甚程目徳を信しや海さ
るる石田に成りふ力し

秀頼とちるまんなあつたのむね
おんゆめくこの事之候く
人の起居たの大いなり力
成り滅亡もをさるる人
悔みあり

めんくそのころあり
行連今一息も待たせざる
や百段本造もさるる

忠良も所々又お人の者
た忠烈もしてけり西へ
わろふとくく赤星も人
倭奸もいひ依せらるんや
これ全くとく武勇の取
いあれ若仁義落さのいれ
あり主人も長あつて
竹程倭人た節むらともお

續の功を立ざらべらんや
願く運統は秀信一時致さる
ゆと石田方へ披露しらん
治部少輔大さきりるはさる
致さるさり又も中へさる
くも尾張の支那さお遠
ゆくの知りるさるの神文
城送りそのく波身博の如鏡と

して川瀬左馬守 梶原彦左衛門
つと人越大おと成 二子金騎
をきりして倣手瑞鶴山のけしと
用意し石田三成が軍兵越也を
と波牟城を攻らるん時の物あ
と一り部く城中をさぶら
大軍評定平及ぶ
さしこの波牟の城と

いふきと必平秀でる
名城として双が山も
退手此口を七曲りして海
あして鑑武者乃性来と
不自由そ勢の害甚き地
あり又一方の志忠谷と
深く切とく勢の害よく
又荒神の洞とて一つの口

ありこの新の上は平地
ありて少ありといふも
櫻りにふるべしはありて
海より水乃手と云ふる
庭深敷扱く本陣は至
つて雲意なり本丸二三の
丸を御常曲掃の通所經
よりよりくちをいへる

とてあつちり越く山の上
庭としては流の扱を水乃
手より掃き了る玉中と
見晴しし本丸手矢倉は
揚二三の丸常曲掃を扱て
七曲りの流手と本丸の
扱く城の中を掃玉葉
充滿結く武具を今の日迄

らりるるは千餘人あり
先軍兵の急利をとらんけんす
千侍七百余騎雑兵を百人以上
除多子のいりさ評定の時木造
依在集の依りよき南城を無双の
梁害しして亦も大河橋中
梳きく敵方より攻討るは
しとくはくちりく一切出合

さの破るひ何百騎を攻るとも
落城する事いりるを教あしり
その内千の大植の城より石田
礪津 小西等城をさるるあり
まのを迎乃目南千おぬゆ案
唯この義城の手配り物あり
左もる時の法方よりお殺を
必定乃掃利と制るべし依て

皆く其心得ありしと云ふは
赤星の又秀信に初めりたるを
義城を討つる時を去るに後を
申すあり河祖父信長公を
八百餘人を今川義元乃四百餘
騎を討つしと云ふ天下此人
これと云ふあり今川義元
朕千一萬の軍兵あり結し
道

小味方お續く前放り川と高
くお防ぐ程なりと云ふ
わが放る者なりと云ふ
よそのは惜事なりと云ふ
ありあり討つて叶りたる時
よその義城を去るに去るは又
去るに去るなりと云ふ
よその中納言秀信なりと云ふ

坂をりありきて打出るおお極
中より先陣を本造左衛門佐八郎
余人銃炮五十挺百段鞍前も
七百余人銃炮五十挺中略物
右衛門又百余人津田及三郎又
百余人越谷或子五百余騎去極
川のつらまれば津田の海りも
前より南より堤をりかへは音

に柵越りて是處を破らん
まれば吉原東河系より申く
叶わざる侍より足らり大將
秀信より二千余人を破身城より
跡して津田村の内堀を破りて
籠を押しこめお城より津田及
左衛門より佐及次郎と大將
とて出張を又籠の中の下知

出陣人赤星内膳ありけし
亦百反越前守木造左衛門佐
友人多し川場へおし身くお
備へたき年しきくひ群
しき秀信忠時と名く水戸
七郎左衛門のせいの川を隔つて
戦ふる中ねれむと馬二三丁
ありて備へたを立る車一あり

川を渡りてる軍をさる必
橋利きる夏をむくし守治川
よして依る本河原高綱 梶原源
太景季又さ河原又さ原太景
等皆く橋利あり是れあり
溺も死する一命と陸軍よりて
敵中にいへく討死する本懐
ありと身と捨多海に此利之

新多時多々を揚と抄して事
 後、此時多々を撰心ふる利
 ありとくるあり

油漬

冥十系軍記二編毫の十二段
 油漬

東 京 書 林	近世 小説 鳴田一郎實録 五十二冊	開明 小説 三田五人切實記 五十五冊	相州 奇談 真土村實録 全	近 代 紀文實録 二十冊
	堀田先生編 造化色論 全	春色先生編 世界大機 全	松村春輔著 三府膝栗毛 三編 大尾	春風日記 全
	於百 實傳 怪妖物語 百十冊 大尾	佐藤のくさり 慶女香	文永堂 大嶋屋傳右工門	誠光堂 池田屋利三郎
	誠光堂 池田屋清吉	誠光堂述	同 牛込細工町	京橋弥左門町

此は某ハお祭のつゝをせしむるを白く加目とて
 まらにまらるゝ更ニ神のやいふきびをす。種
 のの、神志との類、少しもあとなくかたりて、
 ろの、くさるゝるゝ、更合たり、乃、此角の
 種をこれより、はこれ美人とぬりたまふべし

